Seven Fantasia 異聞東方戦記

丁・丁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｓｅｖｅｎ　Ｆａｎｔａｓｉａ　　異聞東方戦記

【Ｎコード】
Ｎ０２３７Ｚ

【作者名】
丁・丁

【あらすじ】
いつかのどこかの幻想郷・・・かつて博麗大結界に生じた綻びから多くの異形が現れ災厄をもたらした。それらを打ち倒し結界を修復したのは当時の博麗の巫女と一部の妖怪、そして招かれた五人の異邦人達だった。
それから年月は流れ、それが御伽話として語られるようになったころ新たな闇が動き出す。
再び始まる戦いに招かれたのは７人。螺旋の勇者、黄金の英雄、優しきくのいち、仮面の探偵、鋼の父、軍人学生、死神執事等だった。

幻想郷を包み込もうとする闇に彼らと住民達はどう立ち向かっていくのだろうか・・・。

#.0　プロローグ（前書き）

※この小説は二次創作やクロスが多分に含まれています。それらが苦手な方やそれぞれの作品のイメージを大事にしたい方にはあまりお勧め出来ません。

#.0 プロローグ

「まずいわね・・・こんなに早く結界が脆くなるなんて」

博麗大結界の境界で彼女は一人ため息をついていた。

流れるような金髪に派手なドレス、そして大きな傘が印象的な女性だがなんだかとても胡散臭く見える。

「うーん、この調子じゃまた前みたいに外から呼ばないとまずいかもね。幻想郷(ここ)にふさわしくない連中もちらほら入ってきてるみたいだし」

幻想郷の妖怪八雲紫(やくもゆかり)はふと前回の結界修復を思い出した。

あの時も本来は来るはずのない別の時間の世界からさまざまな異形の存在が結界をすり抜けて幻想郷に流れ着いてしまった。異形は結界の機能不全の影響で変質しておりそれらを排除するために当時の巫女と一部の妖怪達、そしてそれらを倒すべく招かれた彼らは戦った。その結果、結界は修復され元に戻り招かれた彼らは帰っていった。

・・・あれがどれくらい前か彼女はもう忘れてしまったが。

「聞こえてるかしら」

紫は一枚の札を取り出しそれに向かって語りかけた。札には漢字のような文字が書き込まれている。

「何かありましたか、紫様」

札から彼女の式神の声が聞こえた。

「やっぱりあなたの報告通り結界の綻びが広がっているようだわ。それでなんだけど、しばらく家を空けるわね。すぐに帰ってくると思うけど結界がらみで何かあった場合はいつも指示してあるように行動しなさい」

「分かりましたが・・・どちらに？」

「昔の知り合いのところよ、面倒くさいのだけれどね。それじゃ～よろしく藍」

「御意」

軽い口調の主人にやれやれといった声色で式神八雲藍（やくもらん）は答えた。

「さて、少しばかり疲れるけどしょうがないわよね。さっさとあの女のとこに行かなきゃ」

そして紫はスキマに消えていった。新たな客人達を招くために・・・。

――――幻想郷にはいくつもの伝承がある。それらは幻想郷縁起に大半が記されているが中にはそうでないものも多々ある。そのひとつに五人の英雄の話があった。

かつて博麗大結界が緩み多くの異形の怪物たちが幻想郷に災厄を

もたらした。
その時、外の世界から来た五人の異邦人と博麗の巫女そして一部の妖怪が怪物たちを打ち倒し平和を取り戻したという。
招かれた五人の異邦人はこう語られている。

一人は髑髏の仮面を被り風の如く駆け抜け、

一人は一つ目の真紅の巨人を操り稲妻の如く戦い、

一人は白髪の侍で素っ頓狂な騒ぎを起こし夜叉の如く暴れまわり、

一人は左腕が銃で蛇の如く異形を狩り、

一人は異界の姫で大剣を軽々と扱い月光の如く輝いていた。

・・・という。

そして、これから始まる物語もいつか伝承として語られるのだろう。七英雄の御伽話として。

#. 0　プロローグ（後書き）

今回はプロローグのみになります。至らない点が多く素人丸出しの書き方ですがなんとか続けていきたいと思います。

#．1　『俺にはさっぱりわからねえ！』　その1（前書き）

※この小説は二次創作やクロスが多分に含まれています。それらが苦手な方やそれぞれの作品のイメージを大事にしたい方にはあまりお勧め出来ません。

#. 1　『俺にはさっぱりわからねえ！』　その1

気がつけば見知らぬ場所で寝ていた。どうも記憶がはっきりしない。

たしかでかくなったシモンを見送った後、突然何かに吸い込まれてやたら胡散臭い姉ちゃんから何かを頼まれた気がしないでもないような・・・とりあえず地面の上にはいるようだが辺りは霧で何も見えない。

「じー・・・・」

なんかこう腹が重いし冷える気がする。

「じー・・・・・」

視線を感じる気もするがよく分からねえ。てか腹が減ったな。

「じー・・・・・むむむッ！！！」

目が合った。なんか青い服を着たガキと思いっきり目が合った。しかも俺の腹に乗ってやがる。

「だれあんた、あたいは最強のチルノだよ」

間髪いれずに名乗られた。しかも最強だと？こりゃあこっちも名乗らなきゃいけねえだろう。俺は勢いよく立ち上がり見えない空を指差し叫んだ。

「いいか耳かっぽじってよ～く聞きやがれ！螺旋の宇宙（そら）に悪名轟くグレン団！その不屈の鬼リーダーカミナ様たぁ、俺のことよ！！わかったか最強のチ・・チ・・・チロル！！！」

うん、たしかこいつはチロルとかいってたはずだ。間違いない。なんといっても俺の耳は節穴じゃないからな。しかしチロルは顔を真っ赤にしてこちらを睨みつけている。

「チロルじゃない！最強のチルノ！チ・ル・ノ！！わかったかグロン酸のカミラ！」

グロン酸！カミラ！・・・こいつ、わけのわからんことをいってやがる。たしかに俺も名前を間違ったがこいつほどはひどくない。一文字違うだけだ。

「ぜんぜんわかってねえじゃねえか！グレン団のカミナだ！カ・ミ・ナ！！」

「うるさい！あんたなんかカエルみたいに冷凍してやる！覚悟しろ！」

チルノがそういうと急に辺りが冷えてきた・・・というよりはチルノ自身が冷気を発して辺りが冷えてきている。こいつは一体何者だ？よく見れば背中に透き通った結晶が六本生えてやがる。獣野朗ってわけでもなさそうだが人間でもないようだ。

「なんだとぉ！わけのわからねえことばっかりいってんじゃねえぞ！そっちこそ覚悟しやがれ！」

俺は脇に転がっていたソレを直感的に拾いかまえた。

どういうわけかあの刀があったのだ。ここにあるはずのない刀。しかし今は考えている場合ではない。チルノの周囲はさらに温度が下がっている。見た目はただのガキだが油断はできないようだ。あっちもスイッチが完全に入ちまってるようだし、これは面白くなりそうだ。

互いに少しずつ距離を詰めていく。何かを感じているのかチルノも様子をうかがっているようだ。

おそらく勝負は一瞬、それで決着するはずだ。

刀を握った手に神経を集中させる。

「ヘッ！やるしかないみてえだな！いくぞ！！」

「こい！」

そして両者が一撃を繰り出そうとした刹那、

「ちょっと待った！」

突然誰かの声がした。

「ええと、二人とも落ち着こうよ。ね、チルノちゃんにカミナさん？」

すると霧の中からチルノより背の高い羽が生えた少女があらわれた。

「大ちゃん！」

チルノは今までの状況はどこ吹く風でその少女に駆け寄っていった。

どうやら知り合いのようだがこいつも人間じゃなさそうだ。なんとなくそんな気がする。

「誰だ？」

「私は大妖精っていいます。みんなは大ちゃんて呼びますけど」

ダイヨウセイ？とりあえずは大ちゃんというらしい。チルノと違ってこっちは話が通じそうだな。

「さっそくだがちょいと聞いていいか。いったいここはどこなんだ？地面の上にいるってのはわかるんだが」

俺はとりあえず質問した。他にも聞きたいことはあったがとりあえずここがどこかまずは確認しなけりゃならないだろう。霧で何も見えないし。

大ちゃんは俺を見ながらすこし考えて話し始めた。

「その様子だとおそらくカミナさんは外から来たんですね。いきなりいわれても分からないでしょうけど、ここは幻想郷の霧の湖です」

聞いたことのない名前ばっかりだ。やっぱりわからねえ。

「ゲンソウキョウ？霧の湖？よくわかんねえ・・・うん、さっぱりわからねえ！！それより腹が減っちまった」

分かってることは腹が減ってるってことだった。腹は減らなくなったはずなんだがどういうわけか腹ペコだ。

「凍ったカエルならあるよ。ほら」

チルノが凍った塊を差し出してきた。その中央には緑色の生き物が見える。一応食い物らしい。

「ん？おお、すまねえ。んぐぐぐ・・・なかなか硬いな」

それはかなり硬かった。氷の固まりだし当たり前だが。

「ちょ、ちょっと！それ生ですよ」

大ちゃんは驚いた顔でこっちをみている。なにかおかしいことでもあるのだろうか？

「うまいかカミナ」

チルノは得意げにこちらを見ている。どうやら感想が聞きたいらしい。

「冷たくてよくわかんねえ。ま、腹のたしにはなった。ありがとなチルノ」

それを聞いてチルノはにっこりと笑った。さっきまでのやり取りが嘘のようだ。そんな俺たちを見て大ちゃんはほっとしたような呆れたような表情だ。

「・・・とりあえず博麗神社に行きましょう。あそこなら多分なんとかしてくれると思います」

博麗神社という言葉を聞いてチルノはおおと声を上げた。

「霊夢のとこか。最近いってないな。あたいもいくぞ」

どうやら霊夢というやつが重要らしい。

「じゃあ三人でいきましょう。私もすこし霊夢さんに聞きたいことがあるし・・・かまいませんかカミナさん」

そういわれても俺にはそうする以外なさそうだ。

「かまいやしねえが、その霊夢ってやつがなんとかしてくれるのか」

「そうです。霊夢さんは博麗神社の巫女ですから」

巫女？よくわからん。だが行くしかない。

「それじゃあ道案内を頼む。しかし霧でぜんぜん見えねえな」

辺りはあいかわらず霧で何も見えない。

「ここはいつも昼間はこんなかんじですからね、私たちはなれてますけど。ただ最近はなぜか夜でも霧が消えないんです」

大ちゃんは困っているといった感じの口調だ。

「なんでだ」

「それがわからないので霊夢さんに聞こうかと思いまして」

そして俺は歩き出した。濃い霧の中を二人の妖精に連れられて。

わかねえ・・・ここがどこで何のためにここにいるのか、俺には
さっぱりわからねえ・・・。

#. 1　『俺にはさっぱりわからねえ！』　その1（後書き）

第1話です。グレンラガンといえばシモンよりカミナな作者です。もっと速いペースで書きたいのですが、なかなか手が進みません。でも書き始めてしまったのでなんとか終わりまでたどり着きたいものです。

では次回まで失礼します。

#. 1　『俺にはさっぱりわからねえ！』　その２（前書き）

※この小説は二次創作やクロスが多分に含まれています。それらが苦手な方やそれぞれの作品のイメージを大事にしたい方にはあまりお勧め出来ません。

#．1　『俺にはさっぱりわからねえ！』　その2

霧の湖から博麗神社を目指して三人は歩いていた。視界に広がる霧はいまだ晴れず、辺りに何があるのかまったく分からない。

「何にも見えねえな。ほんとに道わかってんのか？」

「うん、こっちを行けばそのうち山道に出るぞ」

「あと少しすれば霧も晴れてきます。はぐれないで下さいね、カミナさん」

「へい、へいっと」

二つ返事をしつつカミナは思う。やっぱり分からないと。

なぜ自分はここにいるのか、なぜ『博麗神社』とかいう所に向かっているのか、そもそもなぜ自分は生きているのか・・・。

今状況に流されているのははっきりと認識できる。だが、この状況の原因の部分がどうも思い出せない。おぼろげに覚えているのはあの胡散臭い女『八雲紫』の事だけだった。シモンやヨーコ達を仲間と見送った後、あの女はどこからともなく現れ自分に何かを頼んだ。そして気がついてみればこの状況だ。

「あ～わからねえなー！畜生！・・・うん、考えるの中止だ！！」

とりあえずカミナは考えるのを止めて歩くことにした。分からないことを悩むのは性に合わない。とりあえず突き進むのが自分のポリシーだ。

「大ちゃん大ちゃん、なんかカミナがぶつぶつ後ろでいってるぞ」
「大丈夫よチルノちゃん。なんか吹っ切れたみたいだし」
「おう、その通りだ！行こうぜ二人とも」
そしてしばらくたわいのない会話をしながら大妖精達の後をついて行くと徐々に霧が薄くなり、気がつけばカミナは山道を歩いていた。
「・・・で、大ちゃんもチルノもその妖精ってやつなのか」
「ええ。ちなみにチルノちゃんは氷の妖精でわたしは普通の妖精です。まあ普通っていうのであってるかは微妙ですけど」
普通の妖精といわれても、そもそもカミナは妖精の基準が分からないのでとりあえず頷いて見せた。周りに目をやると木々が生い茂り深い森を形作っている。カミナのいた世界とはまるで違う。
「しかしここら辺は木ばっかりだな。俺がいた場所は岩と砂だらけだったぜ」
「そうなんですか」
「ああ。しかもみんな地面の下で暮らしてやがってな、俺は地上に兄弟と出たんだ」
「地面の下か、おくう達みたいだな。カミナには兄弟がいるのか」
「おう！シモンってやつでな天を貫くドリルを持つ弟よ！！」

そういってカミナは誇らしいげに空を見た。思うことはたくさんあるがなんとなく空を見上げたかった。あの日見た空を思い出すように。

「じゃあカミナさんはお兄さんですか」

「そうだ。俺がアニキってわけだ。まあ、血は繋がってはいねえが魂が繋がってる兄弟なんだがよ」

魂の兄弟という説明はいまいちわからなかったがカミナの顔を見て大妖精は納得することにした。

「はあ・・・よく分かりませんが、いい弟さんなんですね」

「ん？なんで分かるんだ？」

大妖精は少し微笑みながらカミナを見て告げた。

「だってカミナさんすごくいい顔してましたよ。弟さんの話をしてるとき」

それを聞いてカミナはすこし照れくさそうな表情をしたがすぐにまた遠い目で天を見上げた。

「あいつはすげえやつさ。まあ、もう会えねえけどよ」

「どうしてですか？帰ったら・・・」

大妖精が言い終える前に突然カミナは叫んだ。

「すまねぇ！大ちゃん、チルノ！」

「え・・・っきゃ！」

とっさにカミナは二人をつかみ隣の茂みに倒れこんだ。

次の瞬間三人の歩いていた場所に何かが撃ち込まれ爆ぜた。閃光の後に爆発音が響き、その場所には穴が開いている。そしてカミナは前方にこの場所に似つかわしくないものを見ていた。

「なんだありゃ、鉄の化け物みたいなやつがいやがる。知り合いかチルノ？」

「あんなやつ知らない。はじめてみるぞ」

それはあきらかに異質な存在だった。人の形はしていたが全身は鉄で覆われており大きさは２ｍ以上はある。歩くたびに機械の作動音と鉄と鉄とが擦れあうような音がし、その前方に突き出された右腕からは硝煙が上がっている。

「おうおうおう！誰だてめえ！！」

威嚇するようなカミナの口調に対して返事はなく、その異形はただ一言、

『・・・・・排除・・・・・』

と、くぐもった電子音でつぶやきそれが答えのようだった。

「たいしたあいさつだな。下がってなチルノ、大ちゃん」

カミナは刀を構え二人の前に立った。

「カミナさん！？」

大妖精は心配そうに目の前の異邦人を見た。

「おら！いくぞ機械野朗！」

カミナは一直線に異形へと飛び込み、相手の懐を狙いすれ違いざまに一閃した。異形は何の抵抗もせず腹の上辺りから真っ二つになり地面へと倒れた。

「おお！すごいぞカミナ！！」

その様子にチルノはおおいに興奮し、大妖精はほっと胸を撫で下ろした。

しかしカミナは手応えのなさに違和感を覚える。

・・・おかしい・・・

相手はどう見ても鉄で覆われた機械の塊だったはずだ。それなのに刀はすんなりと鉄の装甲を切り裂き相手は真っ二つになった。後ろを振り向き倒れた異形へと目をやるとその体は徐々に黒ずみ地面に溶けるように消えていく。

「大丈夫ですかカミナさん。怪我とかしませんでしたか」

大妖精とチルノが駆け寄ってきたがカミナは後ろを向いた。

「どうしたカミナ？」

彼の直感は何かを告げていた。

「いや、どうやらまだ終わってねえみてえだぜ」

直後カミナ達の前方に巨大な対極図のような魔方陣が現れ、そこから次々と機械の異形が出現する。形はさまざまで先ほどの異形と同じ物も見受けられた。

異形の群れの視線はカミナ達に向けられている。

「あんなにいっぱい・・・」

大妖精は息を呑んだ。どう考えてもこちらのほうが分が悪い。しかし残りの二人は違うらしい。

「グレンがありゃまとめてぶっ潰せるんだがな。無い物ねだりしても仕方ねえ・・・よし！まとめてかかってきやがれ！男カミナ逃げも隠れもしねえぜ！！」

「あたいもいるぞ！まとめて雪像にしてやるさ！！」

やる気十分な二人に大妖精は泣きそうな声でつっこむ。

「ちょ、ちょっと！ざっと見て三十体以上はいますよ。いくらなんでも状況がまずいです。いったん逃げましょう」

そんな彼女を尻目にカミナは叫ぶ。

「ここで逃げたらグレン団の名折れだ！いくぜチルノ、大ちゃん！

今日からお前らもグレン団だ！！」

「おう！！」

「ええー！？」

カミナとチルノが突撃しようとした刹那、異形の群れを横一列になぎ払う閃光が轟音とともに彼等の目の前を通り過ぎていった。

「何だこりゃ？」

「むむむ！この光はまさか・・・」

目も眩むような閃光の後に残ったのは数体の異形と残骸だけだった。

そして閃光が来た方向から何かが飛んでくる。それは箒に乗った少女であった。少女はカミナ達の前に降り立つ。

「へへッ、珍しい客を連れてるなチルノ」

軽い調子で黒と白の少女はこちらを見ている。目を引く大きな帽子、左手に箒、そして右手には八角形の石のようなものが収まっている。

「魔理沙！」

どうやらチルノの知り合いらしい。少女は残りの異形のほうを見た。ほとんどは消し去られたようだがまだ動いているものも数体いる。それらは少女に銃口や武器を向けていた。

「ありゃ？まだ残ってる。こっちのもしぶといみたいだな。ちょっと下がってな、もう一発ぶち込んでやるから」

魔理沙は右手を異形へと向け、さらに左手も添える。直後手の中に収まっている八卦炉が展開し光があふれた。

「モード変更、出力１０パーセント追加・・・いくぜ！マスタースパーク！！」

次の瞬間、エネルギーの塊が一直線に残りの鉄の化け物達を直撃した。先ほどよりも閃光は大きいが範囲は短い。光と轟音の後には削られた大地と倒れた木々、そして文字通りのガラクタが残っているだけだった。

カミナはそれを見て驚異とも感嘆ともとれる声をあげる。

「まったくとんでもねえ威力だな。誰だいあんた？俺はカミナ、グレン団のカミナだ」

「霧雨魔理沙（きりさめまりさ）、ただの魔法使いさ。まあみんな泥棒とか変人とか好き勝手いうけどね」

魔理沙はガラクタとなった異形を見た。残っている残骸は少しずつ黒ずみ氷の結晶が砕けるように消えていく。

「しかしここにもこういう変てこなやつがいるんじゃ霊夢のところに急いだほうがよさそうだな」

ここにもという言葉に大妖精は反応した。

「えっ、他でも出たんですか？」

「ああ、姿は違うけど香霖堂にも出たんだ。まあ、やっつけたのはニトリと外から来た人間だけどね」

「外の人間ですか。珍しいですね、二人続けて外から迷い込むなんて」

「そういうもんなのか？ああ～なんかごちゃごちゃして・・・」

突然カミナは視線を感じて森の奥を見た。そこには黒い影が佇んでおりその影は少女に見えた。

「おい、あれは誰だ？」

「どこですかカミナさん」

カミナは黒い影のいる辺りを再び見たがそこには誰もいない。カミナは首を傾げた。

「おかしいな、たしかに黒い服を着た子供が立ってたはずなんだが・・・」

「たぶん里の子供じゃないか。まあ、めったにここら辺じゃ見ないけど。とりあえず博麗神社に急ごうぜ」

魔理沙は箒にまたがり道を進む。その後に大妖精とチルノが続く。

「置いてくぞカミナ」

カミナは立ち止まりあの影が見えた場所を睨んでいたが、チルノ

に声をかけられ再び歩き出した。

「おーう、今行く・・・しかしなんだったんだ、あの影は」

疑問は増えるばかりだが今は霊夢という人物に会うしか道はなさそうだ。とりあえずはそれしかない。そう自分を納得させカミナはチルノ達の後をついていった。

――

カミナ達が見えなくなった後、異形が消えていった場所に先ほどよりも小さい対極図のような魔方陣が現れ、そこから黒い少女が出てきた。少女は削り取られた大地や倒れた木々を見ながら一人つぶやく、

「ありゃりゃこっちもか～残念。でも派手にやりすぎだよね～可哀相に」

そういって札のようなものを取り出し真上に投げた。その直後、削れた地面も倒れた木々も時間が巻き戻るように元に戻っていく。だが音さえしない。ただ元に戻っていく。

「まあせっかくのお客さんにこの程度でいなくなってもらっても楽しくないし、いいかな・・・まだまだ遊び足りないお友達も大勢いるしね。じゃ～また会おうね、螺旋の勇者さん♪」

そして少女はカミナ達の歩いていった方向を見ながら魔方陣に消えていった。後にはただ深い森が何事もなかったように佇んでいる。

一行に魔女が加わり再びカミナ達は博麗神社を目指す。
黒い不吉な影に見送られながら・・・。

同時刻　香霖堂前

「よし、戸締りは終わったよ。残りの壊れたところは、まあ帰ってきてから考えるとしよう」

壊れた店の入り口に応急措置の板を張り終え、香霖堂店主『森近(もりちか)霖之助(りんのすけ)』は後ろにいる二人を見た。一人はラフな格好の髭面の男、もう一人は大きなリュックサックを背負った少女だ。

「すまないなリンノスケ。帰ってきたら私も手伝おう」

答えた髭面の男の手には見るからに硬質そうな赤いケースがぶら下がっている。

「そうしてくれると助かるよ。僕らはこれから霊夢のところに行くけど、にとりはどうする？」

問われた少女は少し考えてから言った。

「う～ん色々気になるからあたしも行く。これはただ事じゃすまないような気がするんだよね」

「その予感は外れてほしいけど難しそうだな。じゃあ出発だ」

歩き出す二人を尻目に髭面の男は思い返す、どうしてこうなったのかと。

「どうしたの？行こうよトニー」

「ん、ああ・・・すまない」

そして彼等も博麗神社へと向かったのだった。

カミナが霧の湖に飛ばされる前、すでに幻想郷に招かれた客人が一人・・・次回『装着せよ。強き自分』。

#. 1　『俺にはさっぱりわからねえ！』　その2（後書き）

第一話終了です。もっと短く分かりやすい文章にしたかったのですが、無理でした。
次回は黄金の英雄に話しが移ります。とりあえずなるべく早く続きを書きたいです。
では次回。

#. 2　『装着せよ。強き自分』　その1（前書き）

※この小説は二次創作やクロスが多分に含まれています。それらが苦手な方やそれぞれの作品のイメージを大事にしたい方にはあまりお勧め出来ません。

#. 2　『装着せよ。強き自分』　その1

「リンノスケ、急げ。ほかに電子機器みたいなものはないか？」

その男は不機嫌そうに白髪の青年に問いかけた。

「残念だがそれだけだよ。前はいくつかあったんだが正しい使われ方をしないうちにガラクタになってしまってね。あれは今思うともったいなかった。ああ、でもたしか残骸が残ってたな」

香霖堂店主『森近霖之助』は下に置いてあるいくかの箱の中から無造作に一つを男に渡した。

「これはゲーム機じゃないのか。たしか日本製のなんたらXとかいったクソ高くて売れなかったやつだ。それに日本版のNESまで混じってるぞ」

「あれ？間違ったかな・・・ごめん、こっちだった」

「まったく。まあPSなんたらの部品は使えそうだな」

男は慣れた手つきでゲーム機のカバーをはずし中身を分解していく。そして不要な部品は即座に投げ捨てられた。その様子に霖之助は感心する。

「しかし、まるで魔法のような手さばきだね。外の人間は何人か見てきたが君のように機械に詳しい人間は初めてだ。いったい何者なんだい？」

「そうだな、あえていうなら正義の味方といったところか。あと会社の社長もやってる。ついでに国防関係の組織にも所属してる」

その男、『トニー・スターク』は当然といった様子で答えた。その間も手は止まらず作業を続けている。

「色々兼任してるみたいだけど、正義の味方っていうぐらいだからそのＭｋ－？て鎧を着込んで戦うわけだ」

コウリンの視線の先、作業中のトニーの目の前には全身が鉄板で覆われた無骨な銀色の鎧・・・もといパワードスーツが立っていた。所々塗装や英語で書かれたロゴが見え胸板の中心にはぽっかりと丸い穴が開いていた。そこにトニーは何かを取り付けている。またスーツからはコードが伸びておりそれは霖之助のＰＣに接続されていた。

「Ｍｋ－？は私がはじめて作ったスーツでね。命の恩人に手伝ってもらってなんとか完成した代物だ。まあ、最新型と比べるときついが今はこれしかない。心許ないが一応急ごしらの装備も追加した」

アフガニスタンでの出来事とインセンのことが一瞬頭をよぎるがその記憶に浸る余裕は今はない。トニーは急いでＰＣを操作しスーツの制御ＯＳを立ち上げた。

「よし、これで起動準備は終了だ」

その時、外から銃器の発射音や何かがぶつかったり弾かれたりするような音が響いてきた。状況は切迫しているようだ。

「外が騒がしくなってきたがあの子は大丈夫なのか？」

「魔理沙は大丈夫さ。こういう厄介事には慣れてる。でも急がないとね」

今外では魔理沙が一人戦っていた。敵の数は不明だが明らかにこちらを狙って攻撃を仕掛けてきている。

「リンノスケ、今からこいつを装着する。ＯＳのほうは急ごしらえでいまいちだがやるしかないだろう。そこの工具でボルトを締めてくれ。時間がない」

「まかせてくれ」

トニーはスーツを装着しながらどうしてこのような状況になったのか思い出していた。あれは前日の夜、自宅の工房でスーツのメンテナンスをしていた最中のこと・・・。

「こんばんは、Ｍｒ．スターク」

それは聞いたことのない女の声だった。反射的に振り向けば東洋風の格好をした女性が立っている。女性は室内だというのに傘を差しどことなく胡散臭くも妖艶に見えた。

「君は誰だ？どうやってここに入ってきた。今日はとくに誰も呼んではいないんだが・・・」

はてとトニーは考えた。今晩は何の予定も約束もはいってはいな

いはずだ。それともまた何か忘れているのだろうか。ペッパーに聞いてみるべきかと思ったが女性は軽く笑いこう言った。

「うふふふ。残念だけどそういうのじゃなくてね。じつはお願いがあってお邪魔させてもらったのよ」

「お願い？」

「そう、あなたの力を・・・アイアンマンの力を貸してほしくてね」

次の瞬間、床に何かが現れた。それは女性の足元から工房全体を呑み込むように広がっていく。まるで何かの裂け目のように。

「これは一体！？」

「スキマよ。あなたを招待するためのね。私は八雲紫。くわしくはあっちで」

「ちょっとまて、わけが分からな・・・」

「残念だけど時間がないの♪どうかよい夢を」

そしてトニー・スタークは工房ごとスキマに呑み込まれ意識を失った。

――――――――ひどく頭が痛む。スーツのメンテナンス中に相当飲んだのがいけなかったのだろうか。一体今は何時だろう。たしか今日はニック・ヒューリーにシールドの件で呼ばれていたはずだ。

遅れると後が面倒になる。

「・・・おいジャーヴィス・・今は何時だ・・・ジャーヴィス？」

しかし彼の忠実な執事とも呼べるそれの声は聞こえない。

「おッ！目を覚ました。おーい香霖！」

かわりに元気のいい少女の声がする。

「ここは・・・一体どうなっているんだ」

まぶたをひらいて彼は驚く。そこは見知らぬ場所だったのだ。どことなく古い時代の日本を思い起こさせるような室内で彼は布団に寝かされていた。こういう経験は二度目だがゲリラの本拠地で目覚めるよりはだいぶましだと思う。

体を起こし周りを見回していると入り口の障子から、青い着物風の服を着た白髪に眼鏡の男が入ってきた。その後ろには金髪の少女が立っている。

「君はうちの店の近くで倒れていたんだ。それをここにいる魔理沙が見つけて担ぎ込んできたわけさ」

「なかなか重かった。箒の寿命が短くなったかも。じゃ私はこれで帰るぜ。あとはよろしく」

「おいおい。彼を霊夢のところに連れていってくれないのか」

「ちょっとにとりに呼ばれてるんだ。なんでも面白そうなものを見

つけたとかでさ。待たせちゃ悪いから私は行くよ。じゃ」

そういうと少女は出て行ってしまった。男はやれやれという素振りをしている

「まったく」

「なかなかいい性格の娘だな。礼も言わせてくれないとは」

状況は理解できないがどうやらあの少女に助けてもらったようだ。

「昔からああなんだ彼女は。たぶん死ぬまであの性格は直らないと思うね。そういえばあんた名前は」

「トニー・スタークだ。で、そっちは？」

男は一瞬しまったという表情をしたがすぐに咳払いをして再び口を開いた。

「おっと失礼したトニー・スタークさん。僕は森近霖之助っていうんだ。まあ、しがない道具屋の主人だよ」

『モリチカリンノスケ』、日本人の名前の響きだ。それに先ほどの少女は『マリサ』と呼ばれていた。室内を見る限り作りは間違いなく日本のそれだ。つまりどういう理屈かは分からないが自分はなぜか日本にいる。どういうことだろう。

だがトニーはそれよりもおかしなことに気がついた。どうして自分は彼等と同じ言葉を話しているのか。意識して日本語は使っていない。それなのに確かに今自分は日本語で話をしている。それもごく自然に。

「状況を確認したい。ここはどこなんだ。少なくとも私の家でもなければアメリカでもなさそうだが日本なのか？それになぜ私は普通に君と会話できる？日本語は一応話せるがこんな流暢には話せないしそもそも・・・」

わけが分からない、おそらく自分はどうしようもなく混乱しているのだろう。だが聞かずにはいられない。ここがどこなのか、なぜこんなにも他の言葉を使えるのか、そもそも自分はどうなってしまっているのか。

「だいぶ混乱してるみたいだね。まあしょうがないけど。とりあえず今いる場所は僕の店兼家の香霖堂さ。もっと正確にいうなら君が今いる世界は幻想郷という場所だ。君がいた世界とは隔離された特殊な世界としか説明できない。それとすまないが言葉についてもよく分からない」

トニーはますますわけが分からなくなった。しかし一つだけ思い出したことがある。おそらく自分をこの状況に追い込んだ人物、八雲紫のことだ。

「そういえば女性が近くにいなかったか。胡散臭いというか妖艶というか・・・たしか八雲紫というんだが」

『八雲紫』という言葉が出てきたことに霖之助は驚いた様子でトニーを見た。

「まさか外の人間から彼女の名前を聞くことになるとはびっくりだね」

「どういうことだ？」

霖之助はトニーに自分の知りえる限りの紫の情報を教えた。そこから理解できたのは彼女が人間ではないこと、非常に長く生きていること、さらに神出鬼没で本当に胡散臭いということだった。

そしてトニーもスキマに飲み込まれたときのことを彼に話した。トニーの話を聞く霖之助はある言葉に強く反応した。

「招待か。いったいなんだろう。そもそも幻想郷に外から来るのは、妖怪の類かたまに迷い込んでくる人間か道具くらいなんだけどな。それに彼女、妖怪の誘致をしているとは聞いてるけど人間を招いたなんてのは初耳だよ。あっ、それと稀にだけど神様とかも来るんだよね。この世界」

彼の知っていることはどうやらこれで全てのようだ。情報は増えたものの逆に疑問は増える一方だ。

「モンスターに神か、なんだか眩暈をおこしそうな話しだ。まだ私は夢から覚めていないのかな・・・そういえば昨日は飲みすぎてたしな。うん、もう一度寝よう」

「信じがたいのは分かるけど残念ながら現実だよ」

再び布団を被ろうとするトニーに霖之助は続ける。

「まあ考えてもしょうがないこともあるさ。向こうでお茶でもどうだいトニー・スタークさん。一応打開策もないこともないし」

打開策という単語を聞いてトニーはとりあえず考えるのを止め布団から出た。確かに彼の言う通りかもしれない。それに自分は混乱

しすぎてネガティブな思考に陥っているようだ。少し落ち着く必要もある。

「すまないがそうさせてもらおう。それと堅苦しいからトニーでかまわない、リンノスケ」

霖之助の後について部屋を出ると廊下には様々なものが重ねられていた。見るからに古い形の家具、新品同様の旧式ビデオレコーダー、何に使うのか検討もつかない器具・・・それらありとあらゆる種類の道具が無造作に重なり合っている。

「いや～整理が苦手なもんでさ。いつの間にかこんなふうになってたよ」

それ以前の問題のような気がしたがトニーは気にしないことにした。

廊下を抜けると店の玄関に出た。そこには商品と思しき道具が陳列されている。廊下ほどではないもののお世辞にも整理されているとは言いがたい。例えるならフリーマーケットやガレージセールのような状態だ。

一通り商品を見回しているとそこには見慣れたものが置かれていた。

「！！・・・Ｍｋ－？じゃないか」

そこに立っていたのは彼が最初に装着したアイアンマンだった。鉄板を張り合わせた装甲は鈍い輝きを放っている。

「これかい？店の近くにバラバラになって落ちてたんだ。それを魔理沙の知り合いが組み立ててくれてね。ちょうど君が運ばれてくる

前だったかな。」

どうやらこの世界に飛ばされてきたのは自分だけではなかったようだ。トニーはＭｋ－２に手を触れスーツ全体を確認した。目立った損傷は見当らず問題なく動きそうだ。

「これは私のだ。他には何かなかったか？」

「いや、これだけだったよ。何か足りないのかい」

「なんともいえないな。こいつはこれで全部だが他のやつもどこかに転がっているのかもしれない」

他のスーツもこの世界にあるのだとすれば見つけ出す必要がある。そう考えていると突然玄関が勢いよく開いた。

「おい！香霖！！」

「あれ？にとりのところに行ったんじゃないのかい」

玄関から慌てた様子で魔理沙が駆け込んでくる。何があったのだろうか。

「なんかやばい連中が店に向かってきてるから戻ってきたんだよ！」

「へ？やばい連中。どんな人達なんだい」

魔理沙はどう説明していいものか迷っていたが、トニーの横に立つＭｋ－２を指さし叫んだ。

「ありゃ人じゃないよ。なんか機械っていうか・・・そう！そこの鎧をもっと強そうにした感じのやつらだよ」

その言葉にトニーは急いで玄関から飛び出し辺りを見回す。だがここからでは何も確認できない。後ろから出てきた魔理沙はあっちだと道の向こうを指差したが、まだ影も形も見えない。

「リンノスケ、双眼鏡はないのか。望遠鏡でもかまわない」

「一応あるけど。はい」

店の中から使い古された双眼鏡が手渡された。レンズを覗き少女の指す方向を見ると、そこには全身が装甲で覆われた機械の兵士達の姿が見えた。

トニーは驚く。あれは確かにスターク・エキスポで自分と相棒が破壊し、最後には全機自爆したドローンだったのだ。それはジャスティン・ハマーが製作しイワン・ヴァンコが暴走させた、ＡＩで動く無人のパワードスーツだ。

それらの中にはまったく姿の違うものも混じっているが問題はそこではなかった。

「間違いない。見たことのないタイプも混じってるがあれはハマーのところの出来損ないだ。なぜここにあんなのがある」

不味い状況だとトニーは思う。手元にあるのはＭｋ－？だけ。せめてＭｋ－？があれば対処も出来た。どうするべきかトニーは思考を巡らせる。

「オッサン、知り合いだったら文句言ってくれないか。あいつら近づいたら問答無用で撃ってきたんだぜ。当たったら危ないっていう

のにさ」

「その割にはずいぶん余裕だな。あと私はオッサンじゃなくトニーだ。それと、残念ながらあいつらに話しは通じない。工具とＰＣはあるかリンノスケ」

「ないこともないけど、どうするんだい」

トニーは香霖堂を見て言った。

「中のＭｋ－２で迎撃する。不安はあるがやるしかない。用意を頼む」

霖之助は無言で頷き店の中へ走った。一方魔理沙は帽子を被りなおし、店先に立てかけられた箒を手にする。

「さっきの鎧を着るんじゃ時間稼ぎが必要だな。なるべく早くしてくれよオッサ・・じゃなくてトニー」

「何をする気だ」

「ちょこっと遊んでくるだけさ。こういうのは嫌いじゃないんだ私」

それだけ言って少女は箒に跨り空へと飛んでいく。トニーはただ呆然とそれを見ていた。

「・・・まったく、本当にいい性格だ。それに空も飛べるとは本当に分からない世界だな、ここは」

店の中に戻ると工具箱をもった霖之助が彼を呼んだ。

「うちにあるのはこれだけだよ。ＰＣはそこにあるのを使ってくれ」
「わかった。それとすまないが電化製品があれば片っ端から持ってきてくれ。少し改造が必要だ」

―――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

・・・そして現在の状況に至る。

あのジャスティン・ハマー製のドローンを相手にするにはこのＭｋ－？では役不足だ。機動力でもパワーでも劣っている。せめてもの救いはその場凌ぎで取り付けた簡易式のユニビームだけだ。状況は悪いが今はやるしかない。

「締め終わったよトニー！」

ボルトの固定を確認しトニー・スタークは全身に力を入れる。
あの八雲紫という人ならざる者はなぜ自分をここに招待したのか。そしてどうして破壊したはずのドローンがこの世界に存在しているのか。考える余裕もなく彼は扉の向こう側へ鋼の足を踏み出した。

『よし、いくぞ！！』

再びＭｋ－？は動き出す。存在しないはずの敵を迎え撃つために・・・。

#. 2　『装着せよ。強き自分』　その1（後書き）

第二話になります。前よりもさらに長くなってしまいました。短く分かりやすくって本当に難しいですね。
今回はアイアンマンからトーニー・スタークの登場です。マーベル・コミックのヒーローチーム『アベンジャーズ』の中心メンバーとして長く活躍している人気ヒーローですが、日本ではあまり有名ではありませんでした。一応アニメや格闘ゲームなどで活躍していましたが、実写映画が公開されて一躍有名になった印象が強いです（私も映画で知りました）。
次回はもう少し分かりやすくまとめたいです。
それではまた・・・。

#. 2　『装着せよ。強き自分』　その2（前書き）

※この小説は二次創作やクロスが多分に含まれています。それらが苦手な方やそれぞれの作品のイメージを大事にしたい方にはあまりお勧め出来ません。

#. 2　『装着せよ。強き自分』　その2

「鈍い連中ばっかりで厄介だな。畜生」

魔理沙は空中で旋回しながら悪態を吐いていた。それは彼女の真下、香霖堂近くの道で蠢く機械の兵士達に向けられたものだった。その数は五体。彼らは香霖堂を目指しているらしく威嚇でスペルカードを使ったが反応はなかった。続けて魔理沙は実際に攻撃力を持つ魔法を数発放ったがそれも無視されていた。

「ここいらでドカンと一発当ててやるしかないかな」

箒の先端部の紐に吊るされた八卦炉に魔理沙は手を伸ばそうとしたが地上から攻撃が来た。

瞬時に体を傾け銃撃をよける。どうやら相手はこちらの動きを一応は警戒しているらしい。

「ったく、鈍いのか鋭いのか分かりづらいったらありゃしない。こうなったら手数で攻めるしかないな」

魔理沙は箒を上に引き急上昇した。そしておもむろにポケットからカードを二枚取り出し前方に投げ呪文を唱える。直後にカードは薄緑の光に包まれ球体を形成した。

球体は箒の動きに合わせるように魔理沙の左右を浮遊している。

「これならどうだ！」

眼下の標的をめがけ一気に急降下する魔理沙の左右の球体からは、純粋な破壊の力を持った魔法の弾丸が高速で発射されている。それ

に対して地上のドローン達は内蔵された銃器で応戦する。敵の反撃をぎりぎりで回避し魔理沙は再度上昇した。

「ようやくこっちを向きやがった。もう一回いくぞ！」

再度急降下をしようと反転する魔理沙だったが、地上から思いもよらないものがこちらへ向かってきた。それは先ほどまで地上にいたドローン達だった。

「なんだよ。あっちも飛べるのかよ。本当に厄介な連中だぜ」

ドローンは三機で残りの二機は地上から攻撃を続けている。目の前の状態に魔理沙は苦笑いする。

「さすがに一対三は面倒くさいな。しかも応援つきだぜ」

その時だった。高速で迫るドローンの一機に背後から光が直撃し、きりもみしながら墜落した。地上を見下ろせばそこには香霖堂でみた銀色の鎧が胸から煙を上げ立っている。鎧はこちらを見上げ叫ぶ。

『待たせたな！かりを返させてもらうぞ！』

どうやらあの男、トニーは間に合ったようだ。

「これで一対二か・・・ついてきなガラクタ三等兵！」

魔理沙は急加速し残った二機のドローンと空中戦を開始した。

――――――――――――――――――――――――――――――

『さて、なんとか一機は落とせたが・・・』

地上でトニー・スタークは道の先に立つ二機の人型を見つめていた。一機は陸軍仕様のドローン。もう一機は見たことがないタイプの敵だ。

『あのメカは一体なんだ。とてもじゃないがハマーが作ったやつにも見えないし』

それは明らかに異質なパワードスーツだった。ドローンより一回り小さく、非常に簡素なフォルムはレトロなブリキのロボット玩具を連想させた。しかも星条旗が胸の辺りに描かれている。つまりアメリカが関係しているのかもしれない。だがトニーはあんな形の兵器は見たことがなかった。これでも元はアメリカ軍の兵器開発に従事していた身である。似たものを見たことがあれば記憶に残っているはずなのだ。

しかしトニーはその考えを打ち切った。優先事項は思考するよりも行動することだった。

『今はそんな場合じゃないな』

さきほどの攻撃はなんとか空中の敵に命中し落とすことに成功したが、Ｍｋ－？に追加したユニビーム発射機構はアーク・リアクターからのパワーに耐え切れず壊れてしまっていた。やはり有り合わせの急造品では無理があったようだ。

残りの武装は両腕の火炎放射器のみ。かつては左腕部に小型のロケット弾が装備されていたが現在のＭｋ－？には発射ガイドしか残っていない。相手は無人のパワードスーツだ。たかだか火炎放射で

は目眩ましにもならないだろう。となれば物理的な衝撃でエネルギーコアか中枢部を破壊するしか動きを止める方法はない。

『近接戦をこちらから仕掛けるしかないか』

分の悪い勝負なのは最初から分かっていた。射撃できる武器もなくパワーでもスピードでも劣っている以上、不用意に相手に格闘戦を挑むのは自殺行為に等しい。しかし他の戦い方は残されていない。すでに敵は目の前に迫っていた。それに相手はどういうわけか銃器を撃ってこない。先ほどの空への援護で弾切れを起こしているのだろうか。だが確認している余裕はなかった。トニーは正面から陸軍仕様のドローンに突進した。

『っく！！』

鉄と鉄とがぶつかり合う金属音が響いてＭｋ－？とドローンは地面に倒れこんだ。急いで体を起こそうとするトニーだったが、右腕の装甲の一部が敵にひっかかりうまく上体を起こせない。そこにもう一体の異質な敵が襲い掛かってきた。

『クソッ！これでもくらえ！』

効果は期待できないと思ったが咄嗟にトニーは左腕からの火炎を敵に浴びせた。すると敵はこちらから距離をとろうと後ろに下がった。どうやらあちらの敵には有効らしい。

引っかかったパーツを強引にはずしトニーは立ち上がる。そして横で上体を起こしたドローンの頭部に真上から右ストレートを叩き込んだ。パーツの砕ける音と、けたたましい電子音が響きドローンは再び地面に倒れこむ。

『少し寝ていろ』

これでしばらく隣のドローンは動けないはずだ。視線をこちらから距離をとった敵に向け両椀を構える。この腕に装備された火炎放射器はある程度の調整ができた。最大出力で放射すればかなりの距離が稼げる。この間合いであればおそらく届くはずだ。

『バーベキューは好きか？私は嫌いじゃない』

敵に炎を発射しようとした刹那、突然霖之助の叫ぶ声が聞こえた。

「後ろだー！トニー！しゃがめー！！」

その声にトニーは急ぎ体を下げた。その直後、左腕の肩部装甲が弾け飛び背面の駆動ユニットの一部も破壊された。スーツの機能が低下したせいで上半身がいっきに重くなる。

後ろを振り向けば先ほど墜落した空軍仕様のドローンがこちらに武器を向けている。そのボディーはユニビームと落下のダメージで破損しているが動作に問題はないようだ。

『仕留めそこなったか・・・』

戦況は限りなく不利となった。前後を敵に挟まれ、横ではいつ再起動してもおかしくない状態のドローンが転がっている。しかも今の攻撃でこちらはまともに体を動かせなくなった。このままでは三方向から袋叩きだろう。

『万事休すか』

だが次の瞬間、突然背後に立っていた空軍仕様のドローンは何か

に殴りつけられたかように横に飛ばされ、同時に周囲は黒い煙に包まれる。トニーの目には一瞬ドローンが立っていた空間が歪んだように見えた。
そして辺り一帯は煙が広がり視界も確保できない。この状態でどう行動するか考えていると、

・・・・・・動かないでね・・・・・・・

囁くような少女の声が聞こえＭｋ－？は何かに掴まれ持ち上げられ移動をはじめた。

『！？』

困惑するがどうすることもできない。しばらくしてトニーは唐突に黒い煙の中から脱出した。そして頭部のアーマー前部を開放し横を見ると、霖之助も同じように宙に浮いていた。そして彼は自分とトニーの間の歪んで見える空間と会話をはじめた。

「ナイスなタイミングだ。助かったよ」

『魔理沙が来ないから迎えにきたんだけど、なんか緊急事態みたいだったから』

その空間から聞こえる声は先ほどの少女の声に間違いなかった。どうしたものかと悩んでいると香霖堂の近くまで来ていた。

『じゃあ降ろすよ。ついでに解除っと』

地面に降ろされた直後、目の前の空間からカラーインクが染み出すように一人の少女が現れた。

大きめの緑色の帽子を被り、髪は青く洋服は水色だった。そして背中に大きなリュックサックを背負っている。

「さすがに大人二人は重いね。アームに補助動力追加しておいてよかったよ。怪我とかない？」

少し心配そうにこちらを見ている少女にトニーは聞かずにはいられないことがあった。

「まさか光学迷彩か。ありえない」

驚いたトニーを見て誇らしげに少女は胸を張った。

「はっはっはオプティカルカモフラージュさ！河童の科学は幻想ィィィィィ！！」

「はあ、こういう時のテンションは高いよね」

軽くため息をつき霖之助はトニーに視線を向けた。

「バラバラだった君の鎧を組み立てたのは彼女なんだよ。店の常連さんでね」

「なんかすごく面白かったよその機械鎧。ええと・・・ああ、あたしは河童の『河城にとり』。そういうメカとか大好きなんだよね」

その口ぶりから本当に機械が好きなのだろうとトニーは感じる。

一礼しトニーは少女を見た。

「私はトニー・スターク。このスーツを直してくれたのは君だった

か、感謝する。それと君が持っているケースは・・・」

にとりの左手には大きめの赤いビジネス用のケースがぶら下がっていた。その表面は硬質そうな鉄で覆われ金属特有の光を放っている。

「これ？その鎧を直した帰りに拾ったんだよ。工房で色々調べたんだけどよくわかんなくてさ。それで魔理沙に見せてから香霖堂の主人に何の道具か聞こうと思って持ってきたんだけど、もしかしてあなたの？」

「その通りだ。確かにナイスなタイミングだな。二人とも少し離れてくれ」

二人が距離をとったのを確認し、トニーはＭｋ－？の装甲強制排除ボタンを押した。一瞬で各部のアーマーが剥がれ地面に落ちる。これはスティンからＭｋ－？を回収した際に取り付けた緊急用装備だった。

「あとでまた直すしかないな。ケースをこっちに」

「え？はい」

にとりは言われるままにスーツケースをトニーに手渡した。

「よし・・・これで反撃開始だ！」

戦いはこれからが本番のようだ。

#. 2　『装着せよ。強き自分』　その2（後書き）

アイアンマンの二回目になります。
とりあえず詳しいことは次話のあとがきで。
それでは次回

♯．２　『装着せよ。強き自分』　その３（前書き）

※この小説は二次創作やクロスが多分に含まれています。それらが苦手な方やそれぞれの作品のイメージを大事にしたい方にはあまりお勧め出来ません。

・♯．２『装着せよ。強き自分』その２からの続きです。先にそちらを読むことをお勧めします。

#. 2　『装着せよ。強き自分』　その3

「一体どうするの？」

にとりは興味津々といった面持ちでトニーを見ていた。彼はその手に持った赤いケースを地面に設置すると、

「こうするのさ」

そう言ってケースの一部を足で勢いよく踏み込んだ。すると機械の作動音と同時にケースの内部から赤と銀の装甲が展開する。彼はその開いたケースに両腕を入れ内部からさらに装甲を引き出した。そして胸の辺りで引き出した装甲ごと腕を開くと赤と銀の鋼がスライドし彼の全身を包み込む。

「おおッ！！！すっご――――――い！！！！どうなってんのあれ！？」

「たまげたね。こりゃ・・・」

にとりは目を輝かせその姿に興奮し、霖之助は呆然とこちらを見ている。その間も鋼のスライドは続き定位置まで移動した装甲はロックされた。

そして最後、頭に銀色のマスクが装着されると胸部装甲から覗くアーク・リアクターから眩い光があふれだし、トニー・スタークは再び『アイアンマン』となった。

『こいつはＭｋ－？、携帯式のパワードスーツだ。機能は省略されているが性能的に問題ない』

トニーはセンサーを起動させ周囲をスキャンした。すると地上に三つ、空中に二つの反応がある。空中を確認すると魔理沙がドローンと激しいドッグファイトを続けていた。どうやら一機落としたらしい。一方地上では頭部を潰した機体が再起動し残りの二機とこちらへ近づいてきている。それを確認しトニーは走り出した。

「大丈夫なのかいトニー？」

『こいつなら問題ない。あとは任せろ』

前進するアイアンマンのセンサーが後ろからきた存在を知らせた。

『ニトリ？』

「その通り。備えあれば憂いなしって言うしね」

後ろからにとりが飛んできた。

『相手は戦争用の兵器だ。危険だぞ』

「それは承知してるよ。でもさ一対三じゃ不公平だよ。何があるかわかんないし」

この状況では確かにそうだ。敵の増援や不測の事態もありえる。それにここは自分の知らない世界だ。

『分かった。では君は光学迷彩で隠れつつ援護してくれ』

にとりは頷き、オプティカルカモフラージュを起動させ景色に溶け込んだ。

アイアンマンはドローンに標準をロックし腕をかざした。するとその開かれた鉄の掌からエネルギー兵器リパルサー・レイが発射される。放たれた光線は先行して進んできていた空軍仕様のドローンを一撃で吹き飛ばした。

『調子は良好のようだ。次！』

続けて、頭部が潰れかけているドローンに両手でのリパルサー・レイが炸裂し強力なプラズマエネルギーの直撃を受けた敵は爆発四散した。

さらにアイアンマンは異質な人型メカを探そうとするが、センサーに映る最初に吹き飛ばしたドローンの反応がおかしいことに気がついた。

カメラをズームし確認するとその全身は黒く変色しており、次の瞬間には氷が砕けるように消えてしまった。

『これは・・・どうなっているんだ？』

その時、にとりの雄叫びが聞こえた。

「目標確認！リミッター解除！いっけー！！」

光学迷彩が解けると同時に、彼女の背負うリュックのサイドポケットから巨大な拳が出現し凄まじい勢いで隠れていた敵に伸びる。異質な人型は避けようとするが間に合わない。

「遅い！」

加速した凶悪な拳は鉄のボディーを砕くには十分すぎた。

「デーストローイィィィ！！！」

激しい破砕音が響き異質な人型は粉砕された。やはりその破片も空中で黒ずみ地面に落ちる前に消滅する。

『これで後は空のやつだけか』

トニーは空中で戦う魔理沙を確認しようと再度スキャンを行う。すると先ほどは二つだったはずの機影が一瞬三つになった。

『まさか増援か？』

しかし詳細な分析を行う前に影はレーダーから消えた。ただの誤認だったのだろうか。

そして上空では新たな動きが生まれていた。空中で絡み合うように魔理沙とドッグファイトを続けていたドローンが突然方向を変え香霖堂へ猛スピードで向かっていったのだ。

「おいおい、なんだよ突然」

魔理沙を無視してドローンは高速でアイアンマンとにとりの頭上を通り過ぎていく。その軌道から予測される行動は店への特攻だった。しかも道と店の間には霖之助が立っている。

『まずい！リンノスケ今すぐ離れろ！！』

「店主逃げてー！！」

自分に特攻してくる形になったドローンに抗議の言葉を吐きつつ霖之助は全力疾走で店の方向へ逃げる。

「ちくしょー！何の恨みがあるんだよ！僕は関係ないじゃないか！このポンコツ！！」

アイアンマンは標準を合わせリパルサー・レイの発射体勢をとる。

『伏せろ！お前も吹き飛ぶぞ！』

その声を聞き、霖之助は道の横の草むらに飛び込んだ。アイアンマンはそれを確認しリパルサー・レイを発射した。

「僕の店――――――――――！！！！！」

放たれた攻撃は店のぎりぎり手前でドローンに命中し、閃光が周囲を包む。

こうして一つの戦いに終止符が打たれた。

――

さきほど魔理沙が戦闘していた高度の遥か上空に人影があった。

「意外と分かっちゃうのね。なかなかいい性能してるわ、あのスーツ」

その姿は少女で黒と赤を基調としたゴスロリ風の服装をしている。

少女は愉快そうに地上の彼らを見下ろし一人つぶやく。

「さすがは黄金の英雄(アベンジャー)ね、今は金色じゃないけど。でも少しお友達が足りなかったみたいね。次から増やすとしましょうか。さ～て次はどこに遊びに行こうかしら～♪」

そして少女は頭上に現れた対極図のような魔方陣に吸い込まれるように消えていった。その様子を見ていたものは誰もいない。

――

香霖堂の前に四人は集まっていた。危機を退けた彼らの顔は安堵と疲労が入り混じった表情をしている。だが店主だけは違った。彼は地面で体育座りをするようにしゃがみ込み悲しみを爆発させている。そんな霖之助に魔理沙とトニーは声をかけた。

「いや～まさかこっちに逃げてくるなんて予想外だったぜ。泣くなよ香霖」

「すまないリンノスケ。まさかこんな事になるとは」

香霖堂の正面玄関は最後のドローン撃破の爆風で悲惨な光景になっていた。入り口の扉はひしゃげ穴が開き、軒先に飾ってある看板は黒焦げとなり、さらに店の外に置かれていた道具は爆風でめちゃくちゃな状態だ。

「もう二度と手に入らないかもしれない物もあったのに・・・ひどすぎる！僕が何をしたっていうのさ！！」

体育座りから突然立ち上がり、霖之助は狂ったように意味不明なジェスチャーを繰り返している。その形容しがたい動きに三人は背

を向けひそひそと会話した。

「彼はいつもあんなエキセントリックな怒り方をするのか？」

「ありゃ相当やばいな。昔ちょっとした出来心で大切にしてた熊の置物を、本で見たパンダとかいう生き物に改造した時もあんな動きしてたぜ。そのときは二週間くらい口も聞いてもらえなかった。ちゃんと熊に戻したのに・・・・・・」

「魔理沙もかなりエキセントリックだよね。問題はそこじゃないと思うよ」

「結局どうすればいいんだ。彼とは付き合いが長いんだろう？」

「・・・じゃあ説得してみるよ」

魔理沙はやれやれという仕草をしてから動きをエスカレートさせる店主の背後にすばやく回りこんだ。

「香霖機嫌直せよ・・・ほら！」

「あべし！！」

首筋にきれいなチョップが入り霖之助は地面に沈んだ。

「「物理的な説得かよ！！」」

ツッコミを入れる二人を無視し、よし！と何かをやり遂げたように魔理沙はガッツポーズを決める。

「私は一足先に霊夢のとこにいって状況を確認してくる。香霖は起きたら元に戻ってるはずだから、博麗神社まであんたを案内するように伝えてくれ。じゃあ嫌な感じがするから急ぐぜ」

彼女はそう言い残し逃げるように飛んでいってしまった。残された二人はなんともいえない表情で立っている。

「さて一応問題は解決したが、博麗神社というのは何なんだ？そこに行けば何かあるのか？」

「ああ、トニーは外の人だったね。簡単に説明すると博麗神社は外の世界と繋がってる場所で巫女の霊夢が管理してるんだよ。まあ管理といっていいかは微妙だけど」

外の世界に通じる場所。それはつまり、

「そこに行けば元の世界に帰れるというわけか」

「ご名答。外から迷い込んだ人間は大抵そこから帰るようになってるんだ。とりあえず行くのは店主が起きてからだけどね」

霖之助が言っていた打開策とはこの事だったのだろう。元の世界に帰る方法は見つかった。しかしトニーはすぐに帰ることはできないと思う。

それはさきほどの襲撃者達の存在だ。倒したドローンや異質なあのメカはＡＩの暴走で動いているようには見えず、明確にこちらを狙ってきていた。おそらく誰かが差し向けたものだろう。それと撃破したドローンの破片の消え方も気にかかる。さらに残っているであろうパワードスーツの行方も探さなくてはいけない。

まったく忙しくなりそうだ。そんなことを考えつつトニーはバラバラになったＭｋ－？の装甲を拾い上げた。

「そうだな。リンノスケが起きるまでとりあえずこいつを修理しよう。手伝ってくれるか、ニトリ？」

「もちろん！聞きたいところもあったしね」

それはカミナが大妖精達と出会った直後の出来事であった。
この後博麗神社へと向った彼らに待ち受ける巫女との出会いはこの世界に何をもたらすのだろう。
そして新たな客人達が幻想郷へ招かれ、物語の歯車は再び回りだす。黒い観客に見守られながら・・・・・。

――

カミナとトニーが博麗神社へ向かったその頃、妖怪の山でさまよう怪しい影が二つ。果たして彼らの正体は？
次回、『忍者、飛ばされるの巻』

#. 2　『装着せよ。強き自分』　その3（後書き）

アイアンマンは今回で終了です。本来ですと二回で終わらせたかったのですが、長くなりすぎたので三分割になってしまいました。手軽に読めてサクサク進む文章が理想ですがまだまだ未熟で恥ずかしい限りです。
それでは次回。

#．3　『忍者、飛ばされるの巻』　その1（前書き）

※この小説は二次創作やクロスが多分に含まれています。それらが苦手な方やそれぞれの作品のイメージを大事にしたい方にはあまりお勧め出来ません。

#．3　『忍者、飛ばされるの巻』　その1

「おいサスケ、なんか楽しい話でもしろよ」

「またですか音速丸さん。では僕が海老川デザインなリアルロボット系に乗って、囁く声が聞こえる行動的な美少女といい関係になりつつ世界を救ってラブ＆ピースな話の続きをしましょう」

その二人は妖怪の山ではまず見ない格好をしていた。サスケと呼ばれた男は全身黒の忍者装束姿で、もう一人の音速丸と呼ばれた生物は羽が生えた丸く黄色い姿をしている。

「バカ！長いんだよ！それにその話は今日三回は聞いたぞ。いい加減別の話をしやがれ、このスカポンタン！！」

「大声あげなくたっていいじゃないですか！あの話しはまだまだ続きがあるんです！音速丸さんこそ海産物系の名前の家族の婿と、毒にも薬にもならない会社生活を送る夢はもうウンザリだって、今日五回以上は言ってますよ！」

二人はイライラしているようで会話に穏やかさは一切ない。声から分かるのは苛立ちと疲れだった。

「飛び過ぎて頭が回らねーんだよ！大体ここはどこの山奥だ！こんな馬鹿でかい滝は忍者学園の近くにはねえぞ！！」

「知りませんよ！気がついたら山にいて音速丸さんしか周りにいないし、忍ちゃんもほかのみんなもまったく見あたらないし・・・最初は何かの罰ゲームかいたずらかと思いましたが私ら間違いなく遭

難してますよね？」

まさにその通りであった。現在彼らは妖怪も入らないような山道の崖をひたすらに迷っている。どうしてこうなったのかまったく見当もつかない。

目が覚めたとき彼らは忍者学園の自室ではなく何処とも知れぬ森の中にいた。行き先も分からず二人は歩き続け、疲労は限界寸前だ。

「そ、そんなわけあるかよ。適当にハイキングしてればどっかに出るもんね！いくぞオラッ！！」

やけになっているのか音速丸は適当に林に突っ込んだ。その後をサスケは追う。

「置いてかないで下さいよ！ってうわあああああ！！！」

草と木で見えづらくなっていたそこは崖だった。

二人は落ちる。音速丸は本来羽で飛べるのだが落ちる瞬間サスケが体を掴んだ為、一緒に崖下に真っ逆さまだ。

「離せよ手前ェ！まだ死にたくな～い！！」

「旅は道連れ世は情けっていうじゃないですか！！一人で落ちるのはイヤ――――――――！！！」

走馬灯が脳裏をよぎりもう駄目かと思った瞬間、二人の体に衝撃と水の感触がきた。一瞬気が遠くなるがすぐに現実へと引き戻される。

聞こえたのは悲鳴、それも女性達の声だった。

「キャ――――――――！」

「変態よ！変態――――――！」
「誰か――――――――――――！」

サスケと音速丸が水面から立ち上がると目の前に三人の女性がいた。彼女達は全裸でどう見ても警戒した面持ちでこちらを睨んでいる。

二人は頭を回転させた。

・山で迷って崖から落ちたがすぐ下が水浴び場だったようで助かった。
・しかし人がいたようで水浴びしていた目の前の女性達はほぼ裸。
・彼女達はこちらの事情は知らない。ストレートに状況を見てどう思うか。
・つまり自分達は天空の城のヒロインというより、覗きをしていて落ちてきた変態・・・　↑今はここ！

「どわー！間違いです！変態じゃないです！事故です！事故！！」

サスケはあたふたと手を振り必死に叫んだ。しかし逆に怪しく見える。

「その通りさ、レディー達。怖がることはない。全然僕ら怪しくないし３Ｄ世代だし勘違いしてもらっては困る」

冷静そうに振舞う音速丸も微妙なことを口走りあきらかに動揺している。

「何事だ！？」

挙動不審な二人は声のする方を見た。そこに立っていたのは一人、

全体的に白い格好をした少女だ。

「悲鳴が聞こえたので駆けつけてみたが、貴様らどこの所属だ。返答次第ではこの場で叩き切るぞ」

　凛々しい声でこちらを威嚇するように睨む彼女の姿を見て両名は歓喜の涙を流し抱き合った。

「お、音速丸さん犬耳ですよ！犬耳！しかも盾と剣装備で完全に騎士やら剣士じゃないですか！ここはもしやファンタジーなとこなんじゃないのでしょうか！ていうか夢！？」

「よく見れば羽とか尻尾とかなんか夢のようなオプションが他の彼女達にもついてるじゃありませんか！サスケ、どうやら俺達はついにあっち側の世界に来てしまったようだな！ありがとう神様！！！！」

　テンションが最高まで上がったバカ二人は、頭から現在おかれている状況が完全に抜けてしまっていた。そんな彼らを哀れむように一瞥し白い剣士は言った。

「・・・言葉が通じんようだ。遠慮なくいくぞ」

「え？」

「ん～？」

　言うまでもなく二人はお縄になった。

――――――――――――――――――――――――――――

同時刻：守矢神社前

「音速丸とサスケさんは大丈夫かな・・・」

ピンクの忍者装束に赤い大きなリボンが印象的な格好の少女は、腰より長い黒髪を揺らし一人空を見上げた。その表情からは不安がうかがえる。

「あんまり心配しすぎると、忍さんが大丈夫じゃなくなってしまいますよ。それに仲間の方達はきっと大丈夫です」

「あっ、早苗さん」

忍と呼ばれた少女の背後に守矢の巫女『東風谷早苗（こちやさなえ）』は立っていた。

「そろそろ夕飯なので、皆さんに声をかけに大広間に行ったんですが、忍さんだけ姿が見当らなかったものですから探しにきました」

「すいません。何から何まで面倒をかけてしまって」

「いえいえ状況が状況なので気にしないで下さい。それにうちの神様は、どちらも賑やかなのは好きですから問題ないですよ。じゃあ行きましょう」

それを聞いて忍の表情は少し明るくなる。

「はい。何か手伝うことがあれば遠慮なく言ってください」

二人は神社に隣接した家に向かった。空は赤く染まりつつある。
早苗は足を進めながら今日の出来事を思い返していた。
あれは昼前、日課である境内の掃除をしていたときの事だ。
突然目の前の空間が歪み、そこから裂けるようにスキマが広がった。そして一瞬のうちに二十人ほどの人影が現れスキマは閉じた。
現れた人間のほとんどが黒い忍者の格好をしており全員が寝ている。
驚いた早苗はとりあえずその集団の中に一人だけいたピンクの少女を起こして聞いた。

「すいませんがどちら様でしょう？」

「はひ・・・あれ明るい・・・んん・・」

問われた少女は寝ぼけていたが、すぐに辺りを見回し姿勢を正すと慌てた様子で早苗を見た。

「あの、その、気分はぐるぐる・・・じゃなくて、ええといつの間に昼に！と、とにかく私は忍者見習いの忍です！というかここはどこなのでしょうか！？」

混乱する彼女をなだめ、他の忍者達を起こして幻想郷について簡単な説明をしていると神奈子と諏訪子がやってきた。二人は驚くかと思いきや、いたって冷静に状況を聞き忍達に言った。

「とりあえず飯にしよう。まあすぐ出せるのは粥ぐらいだが。腹減ってるだろ、お前達」
「そうだね。じゃあ大広間に行こうか。早苗準備お願い」

その後昼食をとり、一息ついたところで神奈子は忍達に聞いた。

「誰か八雲紫って女から何か聞いてないかい？」

その言葉に反応したのは忍だけだった。

「あの怪しい人は力を貸してほしいと言ってました。でも私、『見習い忍者じゃ力不足ですよ』って返したんです。そしたら大丈夫って言われて目が覚めたらここに・・・」

それを聞いて神奈子はなんともいえない表情をしていたが、となりの諏訪子は、

「まあ、しばらくはここにいてもらおうか。なんか仲間もほかにいるようだしさ」

そういってケロケロと笑っている。

よく分からないが二人は何かを前もって知っていたようだ。それがどういうことかは分からない。しかし八雲紫が関っているとなると厄介ごとであるのは明白だ。あの妖怪が絡んでくると大体ろくなことにならない。

早苗は二人にことの詳細を聞こうとしたが教えてはもらえなかった。

「とりあえず今はなんともいえないね。それより、忍の仲間が足りないってのが気になる」

「確かに。あの妖怪は人攫いでミスとかはしないはずだしね」

忍達がいうには仲間の何人かが見当らないという。名前があがったのは二人、音速丸とサスケという人物だった。サスケは他の忍者と同じ格好だが、音速丸という人物（？）はそこらへんの妖怪より奇怪な姿をしているらしい。他にも何人かいないとのことだが、基

本的に皆同じ格好のせいで本人達でも正確な数は把握できていないようだった。

「無事ならいいんですが、この世界は妖怪とかがいるんですよね。食べられたりしていなければいいのですが・・・」

忍は不安そうに言う。ここは妖怪の山だ。そういう事態になっていることも否定できない。それを聞いて周りの忍者も戸惑いや不安を口にした。

「もう胃の中かも・・・南無三」

「貸してたエロゲ返してもらえるかな。まだサブキャラクリアしてないんだよな」

「俺、はじめて神様見たよ！ラッキー」

「神奈子様だろ！普通！」

「需要は諏訪子様のほうが圧倒的だ！」

「おいおいお前等、断然早苗ちゃんだろ。異論は認めない！」

・・・根本的に違うことを言っている忍者もいるが早苗は無視した。

とりあえず行方不明の人達の件は山の警備担当の天狗に伝えておくべきだろう。その他にもやらなければいけない仕事もある。

そして雑務をこなし、気がつけば夕方になっていた。そこで記憶は今に戻る。

彼女と仲間達がどうして八雲紫に呼ばれたかは分からない。しかし早苗は穏便にことが終わるようには思えなかった。それはさきほど見た天狗の新聞のせいだろう。そこに書かれていたのは、最近の幻想郷で相次ぐ小規模な異変と目撃される怪異の記事だ。それらと今回の件は無関係には思えない。

何かが起こっている。それもゆっくりと確実に・・・。

「どうしたんですか早苗さん？」

はっとして隣に目をやると、忍がこちらを不思議そうに見ていた。どうやら考え込んでしまっていたようだ。

「いえ何でもありません。みなさんを待たせても悪いですから急ぎましょうか」

「はい！」

二人は駆けていった。夕日はさらに赤を増し、その色はまるで血のようだ。

そして二人を見送るように、一つの影が先ほど忍がいた場所に立っていた。

「・・・・・・」

無言の影は黒い少女だった。

#．3　『忍者、飛ばされるの巻』　その1（後書き）

今回からシノブ伝の章に入ります。原作は終了しておりアニメにもなった作品です。
作品については次話で。
しかしもっとペースをあげたいですもの。
それでは次回・・・。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0237z/

Seven Fantasia 異聞東方戦記

2011年12月15日03時46分発行